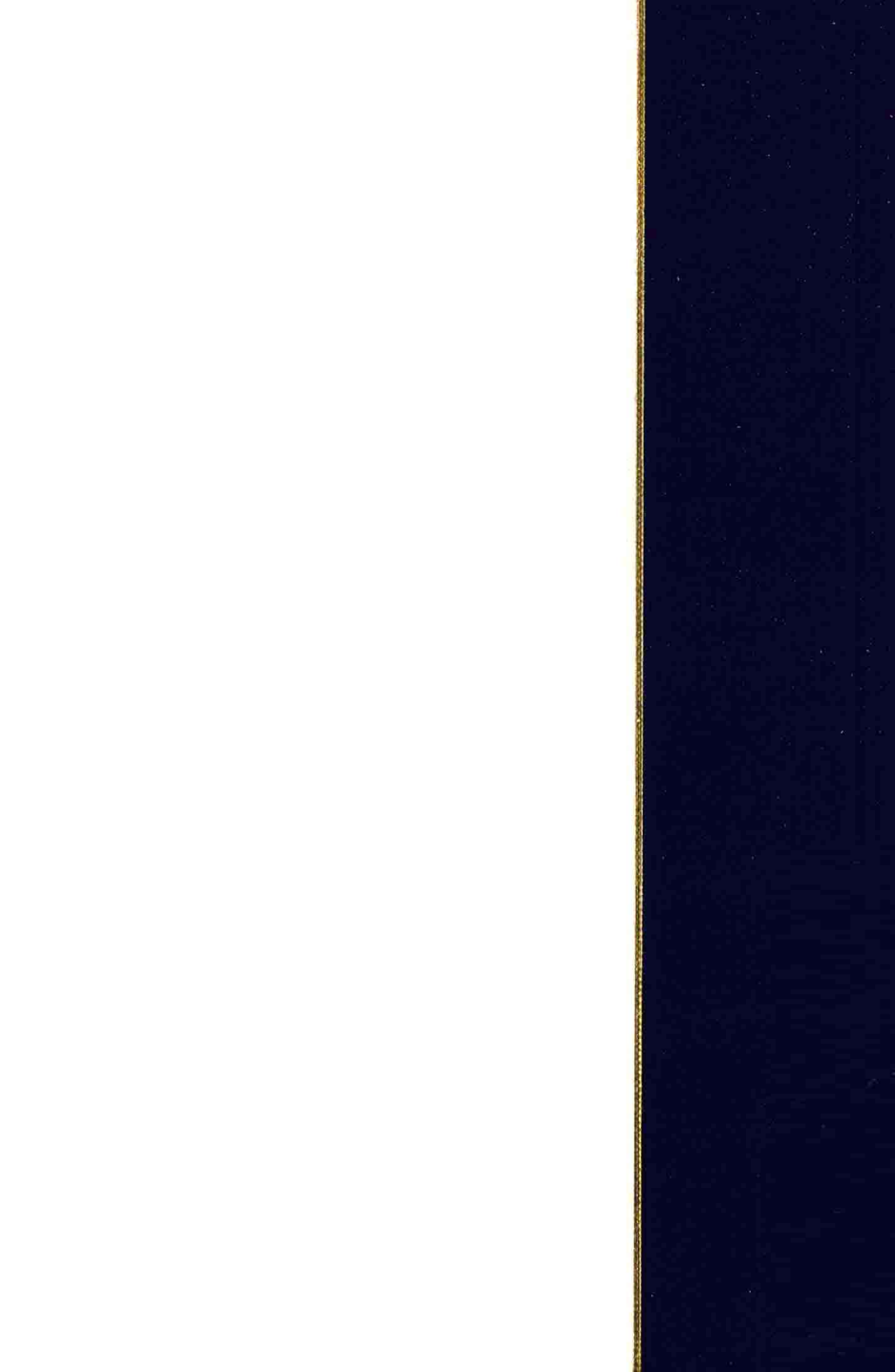




野上清子全集

第Ⅱ期

第十四卷

岩波書店

野上彌生子全集
第Ⅱ期 第十四卷

第二十回配本
(全二十六卷)

一九八九年三月二二日 発行

定価四八〇〇円

著 者 野^の上^{がみ}彌^や生^え子^こ

発 行 者 緑 川 亨

発 行 所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
番地 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三・五二二
振替東京六三三〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

[illegible]

昭和三十六年——一九六一年——

一月一日 日 晴

新しい年になつた。昨日、一昨日ベッドに暮らす方が多かつたが、今日とはにかく服装もかえて朝から書斎にゐる。昨夜の大晦日の夜は正子、和、謙で御年越しそばを食べてかんとんに食事、例年のやうにおうはんもこさへず、これは手伝ひのものにまかされず、すれば自分の仕事になるので、万事やめにして、魚久の口とりものだけで正月の支度もすました。役たないものを相手の歯がゆさから超越すれば、一方またこの上ないのんきさも味へる。お雑煮も私は夜の事にして、毎日と同じく今朝もお抹茶である。

考へるとこの一年は世界じゆう、西欧、アフリカ、東洋、日本の全地域にわたつて変化のはなはだしい一年であつたが、うちでもSの帰朝、秋にはまたMの渡仏とつねにない事がつき／＼に生じた。私の仕事は十一月末、北軽で帰京の支度にかゝつた時から、ずつと中断で、この間の加筆でわづかにノートに戻りかけたのも、からだの調子がなか／＼もとのやうにならなかつたの「が」原因で、まだ一行も先きへは進まない。正月に入つても正子の渡仏の支度もあり、いろ／＼故障が多いだらうが、からださへつねの元氣をとり戻せばきつと今年はかたがつくだらう。又つけなければならぬ。

今度のカゼが半月以上も全快しないのは、ほとんど熱なく、おきてゐればゐられる状態で、むりもし、油断もしたのがわるかつた。それに歳暮の訪問者といふものがあり、なほ逢へばみな久方ぶりの人故、話が長びく。28日にとび込んだ岡田禎子には、その中でもすつかりくたびれてしまつた。ナントカ学院を建てるについて、安倍能成を名誉校長にかつぎださうとした工作その他松山の教育委員会対日教組とのわたり合ひで、彼女の保守的思想は戦争以来のものなるが、なにか田舎政治家といったドロ臭さが増したかんじで、彼女らしい善意はわかつてゐるだけにいつそ気の毒なおもひがした。

ベッドでYが買つて来てくれた高柳氏の「明智光秀」をよんだ。今井宗久と茶の方でとくに深いかんけいにあつた点、いま書き進んでゐる聚楽第内の「明智討」催能によい利用ができる。なほ氏から長篠戦の寄贈を受けた。これは小田原役の戦ひ方に役たちさうだ。

午前は市河へちよつと出掛け、午後は例年の通りみんなで集まつてパンと紅茶、それに冷肉、ニシンの燻製などにて遅いおヒルをとにした後、子供たちは戸外でバドミントン、私は正子、三枝子、Yなどとテレビで漫才や落語を見る。まづめで度く平凡な元旦の一日。フランスのモキへはよせ書き。

一月二日 月 晴

まだセキが完全にやまず、平生のからだに治らないので、年賀の客には失礼しようとしてゐたが、おヒル前朗子来る。彼女らしい長話になる。おヒルも暖い書斎でだし、その後疲れたから少く追ひ

たてる気もちでベッドに入つた。それから小一時間もたつたらうか北軽の安東さんからデンワとの横山さんのとり次ぎに、はつとして茶の間に駆けをりる。先生が軽い脳溢血、右手に少々異状。気分もたしか、言葉にも支障ない。長野原の医師が来診。先生はお弟子さんたちにも知らせるなどいふが、とにかく私だけに内報するとの安東さんの電話であつた。私はとつさに臺さんに前橋から駆けつけて貰ふほかないと決心。それは北軽で私がもし急病になつたら臺氏にレンラクすることを先生にも話し、もしそんな場合には先生にもさうされることを冗談ばなしに勧めたことがあり、その時群大の西さんが先生の小学校の同級生である思ひいで話などで、死んだら群馬大で解剖して貰はうかうん／＼の冗談まででたことを思ひだしたからである。坂口から前橋の臺さんの電話をきいてから、早速レンラクしたら、適当な内科の先生に相談した上、私もいつしよに行きませうと有り難い返事をえ。もとより往診となつても明朝の事になる。今の場合かうするより外に手の打ちようがないとは信じて私の一存だけで取りしきるのもと考慮され、唐木さんにデンワする。電話の底で彼の沈痛なおどろきを感じられた。京都の西谷さんにも知らせなければ、また大島康正氏にも黙つてゐるわけにはいかないが、彼は胃カイヨウが入院して、暮れに退院したばかりのからだで、急をきいても身動きはできない。とにかく明日の臺氏の診察の結果が分明してから第二の考慮をめぐらさうといふ事になる。かうした話も、電話の交渉も私自らのほかは誰にもやれない事で、まだすつかり全快しないからだにはこたへる。

朗子は帰りに燿三のところへより、私を入院させなければ御客さまが停止されないからと力説した

由、自分の長座が私にどの程度こたへたかは考へないところ、朗子式である。

夕方村山さんちよつと、暮れに買つてあつたものを呈上

一月三日 火 晴

和辻夫人にやつと御悔み状を書く。

午後臺氏より先生診察の報告とどく。軽い脳軟化症、血アツ240、長野原の医師とも談合、それを下げる処置など講じた。意識、その他狂ひがないので、これで今度はをさまるならん。今後必要に応じて往診を約したことを話された。安東さんの家からかけてゐたらしく、安東さんもできるだけのお世話をすると言葉を添えて来た。ただ夜の用便の処置など先生はひどく気兼ねをしてゐる様子、それで看護婦を入れる気には相かはらずならぬらしい。

唐木さんにも以上の報告をしらせる。唐木さんは西谷さんに知らせ度いとのこと、それは私が自分のはからひとして唐木さんにしらせたりやうに、彼の考慮によつて知らせたらよからんと返事した。ただ大島さんには、それと知〔つ〕ては病氣を犯しても駈けつけるやうな事になりかねないので黙つてゐる事にする。

安東が私にまで知らせる事になつたのは、野上の奥さまだけには黙つてゐては、あとで私が叱られるからといった由、でなければ臺さんに頼むこともできなかったわけである。これで昨日からの多事がとにかく一段落となつた。年賀客は加藤猛夫氏と豊田実氏夫妻、お玄関で失礼。松井は来たが寐てゐて話し、夜食事させて帰す。

一月四日 水 雨

朝臺氏らへの御礼の事で坂口さんにデンワ。彼から前橋にきいて貰ふ。臺氏は外出中で、奥さんの話だと同行の内科の医師にはすでに 5000 円包んだとのこと故、臺さん分を加へ、一万五千円の送金小切手を送る事にする。

朝唐木氏来訪。それを皮きりに一日ちゆう年賀客たえず、病臥中といつても玄関だけでもといはれる。これは困つた事である。

一月五日 木 晴

午前岡茂生、ウスキの仕様の様子などきく。これで午後は疲れてまたベッドに入つたが、今日も年賀のひとつぎ／＼。一年に今日だけきまつて来てくれ、ゆつくり逢ふ人を玄関で断はるのは心苦しいが仕方なし。暮れて布川夫妻、これは終に寢室に来て貰つた。先生の病氣、彼だけには話し、用場に電熱器をおく事や、おちよさんの下働きに栗平の義妹をたのむ事など、安東氏にレンラクして貰ふ。

一月六日 金 晴

セキも浅くなり、すくなくなつた。ただ精力がもとのやうにはもどらない。それでも午前は書齋で手紙書いたり、それがまたいろ／＼多い。今日はドル送金のことでもマニラの林氏に書く。ニューヨークよりの 300 ドル、門田氏に托された 100 ドル、前者が安着のこと、パリより報告ありしだい林氏指定の輸出入銀行の後藤氏あて返金^{戻金}のことを通知。あゝ、こんな事も私に課せられた仕事なるべ

し。正子、買物のリストをもつて来る。おみあげになりさうなものをいろいろ引っぱりだして渡す。竜村の卓掛、フロシキ、ハンドバック等々。

アメリカは終にキューバと絶縁、ラオスにもじやん／＼軍事的な工作をしてゐる様。この二十日のケネディとの政権交代のまへに急いでこんな手を打つのは何故だらう。これはケネディへの一種の拘束を意味するやうな気さへする。

一月七日 土 晴

今日も無為に、また無気力に、午後はベッド。ゼガースの「決断」を道家から貰つたので、このごろ時とよむ。戦後のドイツ、東と西と引き裂かれた二つの部分の生活が、カンケツな筆で描かれてゐる。党の若い仲間も類型化を免かれてゐる。

一月八日 日 晴

朝は霜が深まつたが、風がなく、外出にもふさはしいので、正子の支度の買物に行く事を決心。新宿から地下鉄で三越に出掛けトランク、手提トランク、ハンドバッグ、ドレッズ、ツーピース、ワンピース、ブラウス、スエタなど下着類をのぞいて一応の買物完了。洋服は仕立てに日がかゝるので、気がせいたわけで、二十三日には縫ひあがるとのこと。正子の好みには任かしてもおかれないし、一気に決定させなければ、いつまでもことはきまらない。83の村上に全部廻はさせ、これは私のプレゼントになる。

こたつ布団も一枚買ふ。十一時―五時近くまで買ひ物にも、どうに「か」さうへばらなかつた。帰り

は渋谷にでてクルマ。渋谷から夕方帰る時に西の空にのぞむ太陽はいつも中々見事であるが、今日
はまつ赤な線香花火のあたまの火の玉のやうな太陽。

さて帰ると留守に臺さんから電話があつた事を知る。安東氏よりのレンタルで今日また北軽に往診
先生がやや悪化。言語ももつれ、麻痺の度も増した。血アツはクスリが下げたが、それらにつき、
たえず細い処置を要するので入院をすすめた。東京までは寐台車でも五時間で少し不安なれど、前
橋なら二時間半。とにかく野上さんと相談の上きめると話してあるといふ。私は前橋に賛成。すべ
て彼に一委した。内科に、満員で箇室がなかつたら、彼の神経科の病室を使用。とにかく明日群大
から迎への寐台車で入院のことがこれで決定。

この旨を南林間の唐木さんに通ずる。かうなればもうすべてパブリックのわけ故、大島さんにもレ
ンラクの上、明日、二人で群大の病院に行つてくれる事になつた。

まつたく、なんと人生には多くのことが生起することか。しかし臺さんにこんなケヤをすべてしよ
はせたのは私であり、それで先生はどれほど気丈夫におもはれてゐるかは十分わかるが、それだけ
臺さんにはすまないおもひが強い。

一月九日 月 小雨

今日は冷雨、昨日おもひきつて買物に行つたのはよかつた。

午後臺さんから電話、先生の入院はいろ／＼の支度の都合で明日になるとのこと。唐木、大島両氏
は今日のつもりで出立なので、まだたつてゐなければ……と先づ大島さんかけると、彼はぬけら

れない会に出席、一度帰宅のうへ前橋へはたつ予定との事、その時に入院は明日に延期の事を伝えて貰ふ事を奥さんにたのむ。唐木さんはすでに午前の汽車でたつたとのこと。——これらのレンラクに大骨をりをする。

一月十日 火 小雨

横〔山〕さんはいままで通りに今日からして貰ふ。私ももう少し動いた方がよいし、電話といつてもとりつぎだけでその他のレンラクには使へないのだから。五日分が超過で八千円支払ふ。

朝から久しぶりに「利休」に復帰。といつても筆ならしと氣もちをその方へ安定させる方法として、「明智討」の書き直しからはじめる。

午後正子あてのモキの手紙たまつてとどく。今井君がマルセイユからパリに来て、日本人の仲間でのしいノエルを過した事が例の細い行きとどいた書き方で明細に書いて来てある。一昨日であつたかはジフの御城や町や、彼の部屋のスナップが沢山とどいた。これまで書いて来た事でも想像されたが、シャシンだとまたびつくりするほどの宿である。モキの三階の部屋は城主の部屋であつたらしいとのこと。

昨夜河野夫人からからだの様子をきいてデンワがかかった。もうベッドに入つてゐたのでをりなかつたが、今朝はこちらからかけ、きつと先きにおきてゐたらしい与一氏に先生の病氣の事をしらせた。入院となればパブリックになつたのだから、いつまでも黙つてゐるのもしらぬらしい。

一月十一日 水 曇、午後雨

正子の円貨で飛行機代支払ひのこといよく決定。暮れから御正月での事務テイタイの上、係りの人が今日まで役所に出なかつた為、都トラベルの高橋氏が毎日足を運んでもはつきりしなかつたのである。こんな事、ちよつと電話でも役所から通知されないものか。

午前はその決定についてMに手紙書き、なほ先生の病氣について臺さんにいろ／＼世話になつたことを報ずる。

午後ベッドでやすみ、彼は三時すぎかとおもふころ、先生の妹さんの野沢夫人が甥の田辺至氏の長男とふゐるに來訪。突然のこととて部屋のすぐ温められる茶の間に通つて貰ふ。ちやうど三越からとどいた新しいコタツ布団をかけてあつたので、さう見苦しい部屋にもならなかつた。妹さんといふ人はただ普通の老婦人で、甥の言動を批判的に見ることはできさうにない。私からいろ／＼探りださうとする事には、私はすべてノン・コメントで通した。ただ梅田夫妻の今日までの奉仕にたいしては、どんな場合にも十分のことをしてやるべきであり、それを私は彼らに約束してあることをくり返しのかた。べた。

そこへ前橋から、はじめ大島つき唐木両氏からデンワがかかつて來た。先生の入院以来の報告、それは実は午前に臺夫人からレンラクで私には分つてゐた事であるが、コタツの二人がきき耳を立てゝゐるので話がしにくい。

前ふれもなくとびこんで、病氣で引きこもつてゐるといふのに、三時間近くもねばられて、また疲れてしまつた

一月十二日 木 晴

まだ年賀のおくれたのがとどく。出さなかつたのに又書いたり。午前大島さんに昨夜の報告、おちよさんが山からついて行つて、着がえもたない風。よぶんの着物があると送つてあげるとよいのだが。ひとにふだん着になるやうなもの、分けるだけのものが本統にはないのだときいたら、他人はおどろくだらう。おふろのあと、十分気をつけてゐたのではあるが、やつぱり少し冷えたらしい。

一月十三日 金 微陽

夕方近くチクマの井上氏よりデンワ。今前橋より帰つたとて先生より感謝のことづて。またおちよさんが大分音をあげてをり、もう一人の派出婦もよい女が来たので、来週早とチクマのくるまで前橋に出掛け、ついでに北軽へおちよさんを連れて行くことなどレンラク。また先生の病室にかけるためレンブラントの画を見つけることも。――

京のSへの手紙。カゼでまだぶら／＼してゐることと、R子の入学金などはその時また考へてあげる事をいつてやる。

一月十四日 土 微陽、

午前大島さんよりデンワ。例の甥の穰氏よりデンワで唐木、大島さんに彼の大森の家に来て欲しい。父の至氏は高血アツで来られないので代人として母が鎌倉から来るとのこと。もとより一応はことわつたが今後交渉がたてないとすれば、さう素つ気なくしてもとおもふ……うんうんの話。

一月十五日 日 晴

朝、「利休」の書き直し少く。体力も幾分ついて来たので、もとの机生活に慣習に戻らうとする訓練。しかし正子の出立までは結句、先生の事とともにゴタ／＼がつゞくなるべし。

午後唐木さん。昨日の大島さんのデンワを伝える。

一月十六日 月 晴

今日も先生のことデデンワいろ／＼。

このごろはこんな事で毎日が空費される。それでも今朝は「利休」の書き直しを少しはしたが……からだは本統でないで、この時間的浪費もいく分慰められる。午後一郎さん。正子は三越に仮縫ひに行つた留守で、久しぶりに話し、カイボシと御子さんに書物をあげる。正子は大抵三十一日にたつだらう。

一月十七日 火 晴、風

「利休」書き直し少く。「明智討」の場で今度弥一さんのけいこの際いろ／＼きくことができた。

一月十八日 水 晴

午後、三枝子がいろ／＼おしゃべり。

一月十九日 木 晴

「利休」書き直し少く、午後少年少女文庫の小林さん。表紙やさしる。すこし高級すぎて子供たちのアップルをこえさうだが、岩波のものらしい特色はある。

そのため宇野さんのまりさん、正子に御別かれに行(つ)たついでによつてくれる。それが小林さん

とかちあひ、また小林さんは来診してくれた坂口さんとかちあひとなつた。

診察して貰つた結果、カゼはもうほとんどよい由、血アツは136で従来よりはまた低い。心臓にも異状ないとの事で、次第にもとの氣力をとり戻すだらう。五百の外に貰ひものゝ泉屋のビスケツトと中国の画報など呈上。

滝井氏よりまた高山の赤かぶの漬物がとどいたので小林さんに金曜御店にでる河野さんにとどけて貰ふ。数日まへ御見舞の意味らしく鶴屋八幡のモノガシが来た為也。

一月二十日 金 晴

午前は呉さんに手紙書き、藤田さんにかき、先日 of 故嶋中氏の十三回忌に贈つて貰つた花代封入。滝井さんと寺沢夫人に海ぼし、おゝ、なんとこんな用事が多いだらう。

午後ふせつてゐたところへ藤田さん。花代は1000円であつた由、私はその三倍封入しておいた。

明日は百合子さんの十周年の記念日、カーネーションを送る事を村田にデンワでたのむ。

一月二十一日 土 晴

午前北軽の安東さん来訪。理事会で上京のついでに、先生について報告する為よつてくれた次第。

今日、明日京都からお客さんが見えるとのこと、多分西谷さんが唐木さんといふだけだつて出掛けらしい。どちらにして「も」先生の一笔がまさかの場合には必要故、前橋には公証人をよぶのも便利なので、是非その事務的なことを果しておいて貰ひ度い、と安東はいふ。今度も発病からすつかり彼が世話をしたわけであり、田辺記念館の企劃についての郡の役所や、県庁との交渉など事務的な事は

私がすべてやつたのだから、先生との接触はお弟子さんたちについて深い事になる。不思議なめぐりあはせ哉。

夜暮れてから、東山の次男といふ慶大生がお抹茶々椀二つとどけて来た。お母さんの手作りといふ。淡灰いろの釉のかかった方が感じがよい。

米国は今日いよ／＼アイクとケネディが入れ代つた。43才の新しい大統領の就任のスピーチには哲学的な思考があり、これがどの程度に実践されるか、されないかは別として、こんな言葉を語ることで主体的にはじまるアメリカの動向は、日本の御即位式なんでもので出発する政府とは質的に次元の違ふもので、それだけはちよつと羨やましい。しかし資本主義もすでに動脈硬化に陥つてゐるアメリカの組織がこれでどう変化しうるものかどうか、それこそまさにクエスチョンである。

一月二十二日 日 晴

「利休」書き直しを終へ、明日あたりから新しい部分になるだらう。この一、二日気候もやや和ごみ、からだには日増しに生氣がついて来るかんじである。

一月二十三日 月 晴

一月二十四日 火 晴、夜雨

横山さんは会のピクニックとのことで月も来なかつたがとくべつ困まりもしなかつた。

今日はおヒルまへ平山さん。末弘さんの御誕生日祝ひで姉妹が集まる由でその途中に見えてくれた。親切はうれしいが、書斎のエントツそうちを渡辺に頼んで、ちようど来てくれたのにできな